告知板

2019 DECEMBER 12 vol.390

【編　集】関東学院大学宗教主事会議
【発行所】〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1丁目50-1
関東学院大学 宗教教育センター
TEL 045-786-7218
【題　字】坂田　祐（元学院長）

クリスマスシーズンの装飾としてなじみ深いツリーやリース等には、様々な植物や素材を用いることがありますが、伝統的には葉の色が変わったり枯れたりする植物ではなく、常緑植物が用いられます。神の変わらない愛と永遠の命を表現するためです（参照：ヨハネによる福音書3章16節）。

聖書の言葉

見よ、このような日が来る、と主は言われる。
わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。

（エレミヤ書23章5節）

預言者エレミヤは嘆きます。神さまの目に正しくないことがまかり通るこの世、人々を間違った方向へ導いていく指導者たち。具体的には、指導者たちが神さまの御心を求めず、自分の知恵に頼り、自分の思いを優先させた結果、南ユダの人々は、住み慣れた愛する故郷、安らかに住まう場所を失ってしまったのです。エレミヤの見つめる先には、そのような時代の不安と疑いの中で、どこへ行ったらいいか分からなくなったたくさんの人々がいました。なんだか、今のわたしたちの時代と似ているようです。でもエレミヤは、ただ嘆いて、怒って終わったのではありません。本当に頼るべきところ、安らぐ居場所を見失った人々に、本物の回復と絶対的な希望を宣言したのです。人々は、南ユダ王国という、切り倒されてしまった大木、そこに残された、死んだような切り株に目を奪われ、絶望のため、泣きに泣きました。しかし、その死んだかのように見える切り株から萌え出でる「正しい若枝」、そこにこそ目をとめなさい、あなたがたの考えや想像を遥かに超えて起こされる、驚くべき回復と希望、それが用意されていることを知りなさい。それが、エレミヤを通して人々に、そしてわたしたちに語られた、神さまの言葉です。

見よ、そのような日が来る。どんな日でしょうか。わたしたちに本当の救い主、主イエスが与えられる日です。主イエスによって、わたしたちは本来いるべき場所に帰ることができるようになりました。主イエスを信じて従う人は誰でも、主イエスに手を引かれて、神さまとの正しい関係の中で、自分の生きるべき道を生きていくことができるようになったのです。クリスマスの知らせは、そのできごとを、悩み多いこの世界にはっきりと指さしています。すべての人が、主イエスを通して本当にいるべき場所に帰ること、それが神さまの何よりの願いであります。そのためにこそ、クリスマスの出来事は起こされたのです。

わたしもこの世界も、どうせ変わらないし、変われないんだ。そう思いたくなる現実があります。その絶望、諦めの壁に、とてつもなく強引にその身をねじ込むようにして、主イエスはこの世に来られました。かつて約束された回復と希望を、わたしたちに、この世界に与えるためです。わずかに、しかし聖書を通してはっきりと見えるその光に目を向けて、2020年へと歩みだして参りましょう。

大学宗教主事　内藤 幹子

関東学院大学キリスト教講演会

元戦争捕虜たちとの和解の旅
～あなたは高価で尊い～

講師：恵子・ホームズ
（「アガペワールド」代表）

2019年10月17日（木）4講時(15:00~16:30)にフォーサイト21 10階大会議室(金沢八景キャンパス)において恵子・ホームズ氏を講演者にお招きしてのキリスト教講演会（関東学院大学宗教教育センター主催）が開催され、参加は約130名であった。

「アガペワールド」代表で英国在住の恵子・ホームズ氏は、第二次世界大戦時に日本軍の捕虜となった英国の元捕虜やその遺族の方々との交流や日本への和解の旅を通じて日英和解の活動を長らく続けておられる。日英両国の友好に尽くした功績がたたえられ、1998年にはエリザベス女王から「大英第四級勲功章(OBE)」を授与されるなど、その和解の活動は特に英国において広く認知されている。

以下、「元戦争捕虜たちとの和解の旅―あなたは高価で尊い」と題する講演の概要を記したい。

「アガペワールド」は元捕虜の方々の心の癒しと和解の旅を主宰する団体であるが、「アガペ」(AGAPE)とはギリシャ語で無償の愛、特に神の無償の愛を意味する。「私の目にはあなたは高価で尊い。私はあなたを愛している」（イザヤ書43章4節〔新改訳〕）との聖書の御言葉を引用し、神による無償の愛とそれを受けての隣人への愛が「アガペ」の活動の根本にあることが語られた。

「アガペ」の活動を行うきっかけとなったのは、日本に里帰りした際に故郷の三重県紀和町に据えられているある墓地の存在を知ったことであった。その墓地は、第二次大戦中、日本軍の捕虜となって泰緬鉄道敷設工事に従事させられ、その後日本に移送され、紀和町の入鹿銅山で使役させられこの地で亡くなった英軍極東捕虜（FEPOWs、Far East Prisoners of War）16人が眠る墓地であった。1988年、ホームズ氏は十字架が立つ大理石の墓がメモリアル・ガーデンとしてきれいに整備されているのを見て感動し、入鹿銅山で働かされていた元捕虜やその家族を探し出したいという願いに強く駆られたという。どのようにして元捕虜の方々とコンタクトをとることができるのか当初は分からず、彼らと会うことができることを神様に祈り続けたという。次第に道は開かれ、元捕虜の方との手紙のやり取りなどの交流が始まる。1991年、ホームズ氏は1000人近い捕虜関係者が集うロンドンで毎年開催される全国捕虜大会に足を運び、日本人であるがゆえに罵声を浴びせられるも、そこで初めて、元捕虜の方々の日本人に対する深い憎しみと怒り、そして心の苦しみと痛みを知ることになる。その際、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネによる福音書3章16節〔新共同訳〕）という聖書箇所が心にうかび、戦争で傷ついた英国元捕虜の方々の心の癒しと和解のために自分が働くよう促されていると強く感じるようになったという。

1992年に最初の「心の癒しと和解の旅」が行われた。この時の参加者のほとんどはホームズ氏が親しみを込めて「イルカボーイズ」と呼ぶ入鹿銅山で働かされた元捕虜の人々であった。かつて自分たちが使役させられた鉱山を再び訪れることにより、そして異国の地で命を奪われた捕虜仲間たちが眠る墓地が日本人の手によって綺麗に整備されている状況を目にすることにより、徐々に彼らの心の痛みは癒されていき、日本人に対する憎しみは消え去り、友情の思いへと代わっていったという。

ホームズ氏によれば、日本国内には連合軍捕虜収容所が130箇所以上あり、そこには泰緬鉄道敷設工事の後に日本に移送された捕虜たちも収容されていた。あばら骨が浮き上がり、骨と皮だけとなってやせ細った捕虜の方々の写真をスライドで見せていただきながらあらためて考えさせられたことは、捕虜の虐待を禁ずるジュネーブ条約やハーグ条約に反して日本軍が泰緬鉄道の敷設工事の際に連合軍捕虜に対してどれほどひどい扱いをしていたかということである。泰緬鉄道とは第二次大戦中に日本軍がインド侵攻作戦遂行のためにタイとビルマ（現在のミャンマー）の間に結んだ物資の供給を目的とする軍事鉄道である。タイのノンプラドックからビルマのタンビザヤに至る415キロに及ぶ鉄道であり、1942年に着工し、翌年10月に完成。この敷設工事には英国など連合軍捕虜が6万人以上、そして20万とも30万ともいわれる現地「労務者」が強制労働させられた。コレラやマラリアなどの病気が蔓延し、食料も医療も十分ではない過酷な状況の中、虐待も受け、連合軍捕虜1万3000人以上が犠牲になったと言われる。現地労務者も含め多くの命が奪われたため泰緬鉄道は日本軍の残虐性を示す「死の鉄道」(death railway)の名で記憶されている。

戦争犠牲者追悼式に参加した元捕虜の方々（広島平和記念公園）

泰緬鉄道の敷設工事を生き延びて、日本に移送され、日本各地の炭坑などで強制的に働かされ、さらには虐待を受けた経験をもつ英国の元捕虜の方々の容易には癒し得ない怒りと憎悪、そして心の痛みがどれほどのものであったことか。ホームズ氏は元捕虜の方々や遺族との交流、そして日本に彼ら、彼女らをお連れすることによって平和と和解を紡ぎだす旅を1992年以来、何十回と続けてこられた。元捕虜の方々との出会いや交流、そして元捕虜の方々と日本人との和解の実例など数多く紹介くださった。

「心の癒しと和解の旅」の話をお聞きし印象深かったのは日英和解への熱き思いの背景に敬虔な信仰があることであった。ホームズ氏は英国人の夫によって主イエスを救い主と信じるキリスト教の信仰へと導かれた。しかし後に最愛の夫を不慮の飛行機事故で亡くし、息子二人とともに英国に永住することを決断。異国の地英国で様々な苦労の中にあって彼女を励まし続けたのは「わたしの恵みはあなたに十分である」（コリントの信徒への手紙二 12章9節〔新共同訳〕）との御言葉であった。神様から大いなる恵みを受けていることへの感謝の応答として、戦争加害者と被害者との和解を紡ぎだす活動に身を捧げることが神様から与えられた「使命」と確信するに至る。和解はいかにして可能なのか。人を赦すとはどういうことなのか。ホームズ氏によれば、「憎しみ」からは「憎しみ」しか生じない。自国の非を直視し、謝罪することによって初めて、赦し合うことができる。和解に至るにはまず謝罪し、赦しを請うことによってはじめてその可能性が生じるのである。主イエス・キリストが私たちの罪を赦し、受け入れてくださったように、私たちも互いに赦し合い、愛しあうことがどれほど重要であり、かつ罪深い私たちには実際にはそれが決して容易ではないことをあらためて考える機会となった。講演後の質疑応答の時間では、学生からの積極的な質問もあり、ホームズ氏の熱意のこもった講演が学生の心に響いた様子であった。平和と和解のために自分には何ができるのか学生それぞれが自ら自問したことであろう。聖書の言葉を多く引用して、信仰に基づく平和と和解の創出の大切さを熱意を込めて学生たちに語ってくださったホームズ氏に心より感謝する次第である。

私事になるが、私は保土ヶ谷の英連邦戦没者墓地で毎年8月第一土曜日11時から行われている英連邦戦没者捕虜追悼礼拝の実行委員を務めている。保土ヶ谷の墓地には泰緬鉄道敷設工事の後に日本に移送され、この地で命を奪われた連合軍捕虜も眠っている。講演の中でもこの保土ヶ谷での追悼礼拝についての紹介があったが、私はこの「横浜」の地から平和を紡ぎだしていきたいと祈り願っている。保土ヶ谷で行われる追悼礼拝の趣旨文には次のように記されている。「連合軍捕虜のうち、一千八百余名は、横浜市保土ヶ谷の英連邦戦死者墓地に眠っています。それらの犠牲者の家族、その身近な方々の日本軍に対する怨念の深さは量り知れません。そこで戦後五十年を機に、1995年、この墓地で初めての『戦没捕虜追悼礼拝』を私たちは執り行いました。礼拝の原点は、憎しみの消えない犠牲者と日本人との和解のきっかけが与えられることです。それにより、世界の恒久平和の実現が可能になるのです。怨念と憎悪を克服し、過去の事実を直視し、わが国の戦争責任を認識し、被害者へ謝罪すること、それが和解の前提です。わが国の指導者は日本国日本人の犯した過去の罪に目を背けています。しかし、私たちは、その罪を見据え、心からの謝罪を表明いたします」。ここには「アガペ」の活動と通底する諸点を見ることができる。講演を通じて私たちに多くのことを教えてくださったが、その一つは謙虚になること、つまり自分たちの非を認めて反省すること、そして祈ることと主を慕い求めることである。ホームズ氏はエリザベス女王から「『アガペ』の働きを'末永く続けられますように'」と激励の言葉をいただいたという。来年2020年も英国の元捕虜の方々を日本にお連れする「和解の旅」を計画しているという。「アガペ」の活動については、恵子・ホームズ著『アガペ―心の癒しと和解の旅』（いのちのことば社 フォレストブックス、2003年）に詳しいので参照されたい。ホームズ氏による「心の癒しと和解の旅」が今後も主によってさらに豊かに用いられ、平和と和解が創出されていくことを切に祈りたいと思う。

（大学宗教主事　豊川慎）